

広報あしや

1996年 (平成8年) 1月15日号

No.692

毎月1日・15日発行

発行/芦屋市役所(広報課)

☎0797-31-2121

〒659 兵庫県芦屋市精道町7番6号



復興への誓いを込めて紙風船を空へ (昨年10月に行われた あしや秋まつりにて)

— 阪神・淡路大震災から一年 —

復興へ

阪神・淡路大震災 芦屋市犠牲者 合同追悼式のお知らせ

阪神・淡路大震災から一年を迎えるにあたり、震災の犠牲となられたかたがたの御霊をお慰めし、哀悼の意を捧げるため、芦屋市犠牲者合同追悼式典を行います。

日時 ● 1月21日 (日)

午後1時～3時

会場 ● 県立芦屋南高等学校体育館

・ご遺族の皆さまには、すでに案内状を送付しています

・一般のかたの用意は午後3時から4時まで同所で受け付けます

・会場には駐車場がありませんので、バスをご利用ください

問い合わせ ● 市長室秘書課 ☎382000

兵庫県主催

阪神・淡路大震災犠牲者追悼式典

日時 ● 1月17日 (水)

午前11時55分～午後1時

・式典終了後、一般のかたの献花を行います
会場 ● 兵庫県公館

(神戸市中央区下山手通4丁目4-1)

問い合わせ ● 兵庫県防災部総務課

☎078-341-7711

阪神・淡路大震災 追悼記帳所の設置

犠牲者の冥福を祈り、哀悼の意を記していた
だく記帳所を設置します。

日時 ● 1月17日 (水) 午前9時～午後7時

場所 ● 市役所南館玄関ロビー

問い合わせ ● 保健福祉部総務課 ☎382041

1月17日(水)正午のサイレンを合図に一分間の黙とうをお願いします。

あの日から一年 今思うこと

あの阪神・淡路大震災から一年が過ぎようとしています。他市の職員のかた、そして自衛隊のかた。遠くから応援に駆けつけてくれた、ボランティアのかた、あるいは町内会やコミュニティの世話人として、復興に向け、力強く歩み始めておられるかたがた。一方では、やむなく芦屋を離れ、今も他市での生活を余儀なくされているかたがた。すべてのかたにとって、万感の思いで迎えるこの1月17日であることと思います。今号では、震災一年の特集として、そういつたかたがたのさまざまな思いをお寄せいただきました。

支援活動に思う

新淵水道局企画室長補佐 大沼 博幹



阪神大震災の報道を受けて、新潟市ではすぐに支援活動の準備に入りまりました。

昭和三十三年の新潟地震の際に、阪神地域の方々から多大の御支援を頂いており、この御礼を込めて水道局が支援活動の先発隊として出発しました。

芦屋市への水道関係の支援活動の全体としては、応急給水と被害調査のため、一月十八日に先発隊(七名)が出発し、その後の応急復旧には新潟市、長岡市、三条市、柏崎市の職員と、それぞれの都市の管工事業協同組合で作業隊を編成、第三次隊まで派遣し、二月十五日に支援活動を終えています。

この間の七百十六人の人員のほか、給水車、建設機械をはじめ、応急作業に必要な道具一式を搬入しています。

私は二週間ほど芦屋市におりまして、水道部の職員と一緒に応急給水、被害調査、復旧戦略等の支援に従事しましたが、職員の中に



阪神大震災の支援活動に協力した新淵水道局の災害応急給水車。車体には「新淵水道局 災害応急給水車」と記されている。

同じ市職員として

柏市第一水産団副団長 秘書課課長補佐 会澤 隆

一月二十一日午前六時、柏市から十七時。団員十名と車四台はようやく芦屋市役所に到着した。

現地の惨状を前にしたとき、夢ではないかと目を疑った。破壊されたまちの光景はもろろん、特に、市役所に避難されていた市民の皆さんの寝姿に、言いようのないショックを受けた。鉄道ならば四、五時間。何不自由な生活を送る我々と被災者の方々の生活状況の落差に、まったく割り切れない思いがした。

「同じ公務員として何かお手伝いはできないか」。北村市長さんと面識のあった市長も同じ思いでした。本多市長は神戸育ち、実家は今も須磨区にある。市長から「北村市長さんに、何でも言うってください」と連絡を。と指示。翌十八日、混乱の中、多少躊躇しながら電話連絡。やはりなかなか返事がない。十九日午後、ようやく「車両と人手の派遣を」との連絡が来た。

防災対策室は、ただちに関係者を集め、車と職員の派遣を決定。詳細が不明なため、車は防災指揮車、小型ダンプ、クレーン付トラックなどを手配。また職員は時間がないので、車両操作の得意な職員など若手中心に指名。テント、寝袋、食糧、水などをあわただしく準備し、翌二十日の昼過ぎに出発した。第二陣以降、四月一日までの団員は希望者の中から選んだ。柏市が受け持った業務は「広報活動」と「物資」の応援であった。第二陣で広報用の車両と無線機を導入。機動力を図りながら広報活動の手伝いを行った。被災者の方から「遠くからありがとう。柏が被災したら一番に飛んでいくからね」との言葉。

第一陣の団長として、その後の支援をどうするか、不眠不休で目をまっ赤にした被災者でもある職員の方々に確認しながら、なんとか使命を果たした。百十八名の応援職員は、もちろん、三十二万柏市民は、芦屋市の皆さんの一日も早い「復興」の日を祈っている。

震災から一年にあたって思うこと

陸上自衛隊 第十特科連隊副連隊長 三宅 久仁夫



あの悪夢の阪神・淡路大震災から早一年になろうとしています。

震災の災害派遣出発に際し、全隊員に対し連隊長は「被災者は、我々の親・兄弟と同じである。これらの人々のため、一生懸命頑張ろう。」と訓示した。隊員はこの訓示の通り劣悪な環境の中、被災者の気持ちになって救出・救援、復旧活動によく頑張ってくれました。本当に頭が下がる思いでありました。

また芦屋市の職員も北村市長を先頭に後藤助役以下が、自分の家族が、家が被災していることをおくびにも出さず連日市役所に泊まり込み、被災者の救援、まちの復興・復興のため、まさに寝食を忘れて頑張っていた。自分の事より市民のためという心意気が打たれた。勿論、被災者の市民も相互に助け合い、また手のあいた人はボランティアをかって出て、他の被災者のために活躍されていた。まちは震災で荒廃していたが、このような今の日本で失われつつある、

震災から一年にあたって思うこと

札幌市派遣職員 福島 均

平成七年一月十七日、朝、札幌。連休明けの気だるい気持ちで奮立させて、いつもより一本遅れの電車では職場に向かった。職場に着くと何やら騒がしい。神戸の方で大きな地震があったという。あつけない横たわった道路、高層ビルが倒壊し、燃え上がるまぢ並み。信じられないような光景をテレビが映していた。未明の寒空の下では何百万もの人々が恐怖に震えていたはずだ。しかしどこかに醒めていた。申し訳ないけれど千五百kmも離れていたそんなものだろうと思う。

それから三カ月後、私は芦屋に來ている。既にまちは落ち着いたようにも見える。少しく前まではそこにも生活のぬくもりがあつたに違いない。北村市長はまたこの責任を背負っていられた。この姿があつた。未曾有の被害をもたらした大震災の陰はそう容易く拭ききれぬものではなことを思い知らされた。これから一年間をこのまちで暮らすのだ。ほんの少しの緊張と興奮に胸が震えたのを覚えている。

あれから十カ月が過ぎようとしていて。建設部公園緑地課の一員として、被災した公園の復旧のお手伝いをさせていただいている。手伝いをさせていただいている。職員の方々の生の体験談から、また自分の目で見たそのままの現実から、震災直後からまちが落ち着きを取り戻すまでの間に多くの人々の苦勞があつたことを身近に感じる事ができるようになった。私を離れる日、私はこんな挨拶をして来た。「現地は何をする事になるのか、何が出来るのか見当もつきませんが、せめて被災者の方々に元気づけてしようと思つて」

人のために尽くす・奉仕する。思いやりのある美しい心と人間関係が芦屋のまちのこの、こそ、あそこの見聞するものが出来、本当にさわやかで素晴らしい体験の連続する災害派遣であった。私が体験・見聞した中のいくつかの話を紹介します。

救援物資の集配を担当していた物資班の班長の話

「救援物資が全国から昼夜を分かたずドンドン送られてくる。二十四時間態勢で対処する必要がある。真つ先に女子職員が「やりましょう。」と言ってくれた。普段であれば関係係れいもマヤリ玉に上がる自分、職場のみならず昼夜を分かつた、フラフラになりながら市民サービスに努めてくれた。三月末には定年退職であるが、最後に素晴らしい体験が出来て幸せです……。」

その二、ガレキ処理中の出来事 「自衛隊さん御苦勞さん。このコーヒーを飲んで下さい。」 「戴けません。それは被災者用のものですね。」 「そのコーヒーを下下さい。その代わりに私の持っているコーヒーは私のもので、これを自衛隊さんにあげます。是非飲んで下さい。」 「いい戴けません。」

数回の押し問答の末、有難く戴きました。この市民の方の温かい心に接した隊員の士気は大いに上がったのは言うまでもありません。

元の芦屋のあの美しいまぢ並みが復興と共に、震災で生れ、育まれた、人に優しい・思いやりのある美しい心を持つ人のまぢ芦屋が蘇っているものと確信しています。またいつの日か、今度は災害派遣でなく訪れる事を楽しみにしています。

震災から一年を迎えるにあたり、犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、この芦屋が一日でも早くものと美しさを取り戻すことを願わずにはおられない。昨日まで街角で話していた人々を一瞬のうちに遠くへ連れ去ってしまった平成七年一月十七日未明の大震災。肉親を失った人ももちろん、思い出の家や家財を失った人々は、ただ飲み水を確保するだけでせいっぱい、とても洗濯の水、ましてやお風呂に入りたい「など」とも考えられない日々が続いていた。

呉川町、花木水芦屋温泉ボランティアの一員として

会長 北尾 信一



昨日まで街角で話していた人々を一瞬のうちに遠くへ連れ去ってしまった平成七年一月十七日未明の大震災。肉親を失った人ももちろん、思い出の家や家財を失った人々は、ただ飲み水を確保するだけでせいっぱい、とても洗濯の水、ましてやお風呂に入りたい「など」とも考えられない日々が続いていた。ようやく給水車で飲み水の供給が安定してきて、各地からボランティアも集まってきた頃だった。一月二十日に起工式が行われるはずだったことになって、みんなが忘れていた保健福祉総合センター予定地のお湯が入浴に使えると、誰となく言い出したのは。

それが市原のご尽力と、呉川町自治会連合会、浜芦町、芦屋市、辺自治会、子供会、宮川コミスク、大阪芦屋ガールズスカウトのボランティアの協力で、震災から僅か半月、二月二日、花木水芦屋温泉としてオープンすることになった。こんな混乱のなかで温泉が……という不安材料ばかりのなかでのスタートが、絶望のなかで疲れてきた人々の心身を癒し、確実に復興の力になっていくことに。何のマニュアルもなしに、受付、案内、呼出、広報、場内整理、浴室

天の震災・人の復興

若菜仮設住宅「コミュニティ」世話人代表 重川 忠廣



震災後数日して市内を歩き始めると、家々の被害もさることながらごみステーションに壊れた家から引き出された多くの物が捨てられていた。歴史にちよつとばかり関心のある私にとって、戦後から現代までの生活を表すこれらの震災を理由に失われて行くことに不安を感じた。もう少し古い時代の民俗資料や古文書などと同様に、ごみステーションにあつたこれらも今の価値観で判断せず、歴史の空白を作らない救済の手が欲しいと思つたのです。

水も食料も配給に頼るなかで、寿司でも何でも揃っている何ら変わっていない大阪への通勤で見る沿線の風景の変化は疎外感と落胆の繰返しであった。また、仮設住宅人居までの約一カ月の大阪での疎開生活は、被災地で全国から駆けつけたボランティアが活動しているのには自分は不自由なく過ごしているうしろめたい気持ちでいっぱいでした。

仮設住宅ではあつても震災前と同様というか、ごくあたり前の社会生活を営み、落ち着きを取り戻し、「明日への希望」を持って余裕が生まれれば復興へのエネルギーも必然的に湧いてくると思います。我が愛する芦屋の復興を願い、住み続ける願いがかなえられる施策を一日も早く明示していただくことが、私達、仮設住宅住民の行政への一番の願いです。

震災から一年経って

たすけあいのつじ会 吉田 清子

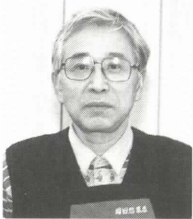


阪神大震災で、物より大きく豊かなものがあることを学びました。震災後の混乱の中、空腹と睡眠不足の体で水運びをしてくれた少年、青年、汚れたトイレ掃除を続けてくれた少女、僅かばかりの水や食料品を分けてくれた人々、人々、人々、いつまでも心の感動を忘れることはできません。

一方、被害の小さかった住民は土地カンもあり、市外からかけてくれたボランティアを待つまでもなく、いち早く対応できたのは確かです。しかし混乱に紛れて残念ながら動けずじまいでした。災害時は多種多様な緊急のものや危険を伴うものがあり、市と民の協働行動を余儀なくされます。この協働行動は普段からのコミュニティ

震災後 思うこと

芦屋センター事業協同組合 復興計画委員長 岡田 幸作



あの日、一月十七日の早朝、突然の大揺れに飛び起きた。家族の無事を確認し、店の事が心配で息子達と市場へ走った。どうか無事な姿で残っていてほしいと願いつつ。が現実は無残だった。

家に電気がつき、テレビで各地の被害の大きさにショックを受けた。それから何日かは避難所に居る知人達にたき出しをし、後は水くみの日課。だが商人とは何と悲しいものか。店がつぶれるとその日から仕事がなく収入がない。毎日焦燥感でいっぱいだった。店をしたい、一日も早く。そんな思いの仲間が集って話し合い、手さぐりで動き始める。試行錯誤の日々。

何とか前へ進みたい。商売がしたい。六月の末仮設店舗ができ、少しおちついた。今はマンション付きの本店舗ができるまでと、仮設店舗でがんばっている。幸運な事に、お手伝いしてくださる方が居て協力し合う仲間もいる。少しずつ歩んでいる。何とか皆と力を合わせ一日も早い完成を目指している。現在、バラバラになっている元組合員の「一日も早く帰りたい」という声に奮奮している。震災に遭つて家族の絆、隣近所の助け合い、ボランティアの方々の無償の働き、皆の底力を見せつけられた気がして、自分もがんばらねばと思つている。



(※)一日ピーク時/二千二百人 前後 一日平均/八百五十九百五十人 前後

芦屋から奈良へ そして福岡へ

全壊家屋からの脱出
三浦 和子

一月十七日、ごみ出しの為立ち上がった瞬間、ミキサの中で掻き廻された様な四十秒、高齢の姑に声を掛け、真暗の中少しの光を見出す迄の恐しさ今も鮮明に浮びます。

明るくなった家の中、主人は血まみれの足で歩き廻り、姑は倒れた家具を両手で押え、私は考えもつかぬ倒れた食器棚を乗り越え、玄関のドアを開けに走り出しました。お隣の御助力で押ししてもらいどうやら開きました。が、今度は閉らずに難儀でした。

前の幼稚園に避難し、畳一帖程の空間に親子三人休みました。一家の働き手の私を休ませようとの姑と主人の配慮で、私だけは寝ました。無理な生活に私の友人の空き家の提供を受け奈良へ。渡る業者は頼み込み、想い出の芦屋に未練を残し、馴れない生活で一日を過ぎ、二月五日、無理がたたわり病気が知らずの姑が救急車で入院。六つの病名で二週間、やっとあの世からお別れし通院の運びとなりました。

暗中模索の一カ月でした。便利な芦屋から不馴れな土地へそれなりの幸をさがし、七カ月過ぎ伝手を求めて関門海峡を渡り、福岡へ転居。今の住いにすぐ入れず、三カ月程市営住宅に入居、只今現在落着く場所に落着きました。数少ない荷物も納まり、普通の生活となりました。

一月十七日の避難所から四回の引越し、位牌と少しばかりの身の廻り品を持ち、九十二歳の姑を見ながら、多少眼の不自由な主人を叱咤激励し、或る時は夜叉の様な私もやっとなんか本来に戻りつつあります。

つらい悲しい一年でした。全壊のマンションは今更地となりました。芦屋が好きで、芦屋が自慢で一生涯離れるなんて考えもしなかったその芦屋、一日も早い素晴らしい芦屋に生まれ変わっていただける

事のみ祈る昨今です。



姑 九十二歳
主人 六十八歳
私 六十三歳
◎福岡の市営住宅前にて。

阪神間都市計画 変更案の縦覧

■次の都市計画変更案について、縦覧します。
これは芦屋中央震災復興土地区画整理事業区域内における道路、公園について都市計画決定を行うものです。（芦屋市決定）

阪神間都市計画（芦屋国際文化住宅都市建設計画）

- 1 道路の変更
中央1号線ほか10路線（区画街路）
- 2 公園の変更
大榎公園ほか1公園

縦覧期間：

1月19日（金）～2月1日（木）（午前9時から午後5時15分まで）

縦覧場所：

都市計画課（松ノ内町一・二・三 五 ライフ2階）

その他：

この案について市民および利害に関係あるかたは、縦覧期間満了の日までに芦屋市長宛意見書を提出することができます。

問い合わせは：

都市計画課 ☎382073

※別途、住宅・都市整備公団が芦屋中央震災復興土地区画整理事業の認可申請を行います。それに伴う施行規程および事業計画の縦覧については、日時等が決まり次第お知らせします。

いざというときに備えて

問い合わせ/市長室防災対策担当 ☎38-2093

自然災害による戦後最大の被害をもたらした阪神・淡路大震災から1年が過ぎようとしています。復興に向けての決意を新たに、将来にわたる防災意識の向上を図る年とします。
いざというとき、十分に活動できるよう日ごろから積極的な防災活動を行っておくことが大切です。防災の知識を学び、非常時に落ち着いて行動できるように心掛けましょう。

避難所一覧表

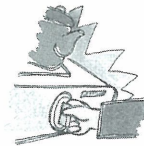
名称	所在地	電話番号
三条小学校	三条町39-20	34-0501
山手中学校（南校舎のみ）	三条町39-10	32-1122
西山幼稚園	西山町22-15	32-5457
前田集会所	前田町9-11	23-3899
山手小学校	山手町8-3	32-1113
市立芦屋高等学校（体育館のみ）	佃谷9	32-1131
大原集会所	大原町20-2	38-7782
市民センター	業平町8-24	31-4995
上宮川文化センター	上宮川町10-5	22-9229
朝日ヶ丘小学校	朝日ヶ丘町10-10	32-1115
朝日ヶ丘集会所	朝日ヶ丘町30-9	23-4896
岩園小学校	岩園町23-41	32-1114
芦屋大学附属中・高等学校	六麓荘町16-18	31-0666
岩園保育所	岩園町2-18	31-0335
翠ヶ丘集会所	翠ヶ丘町9-15	22-2475
精道小学校	精道町8-25	32-1111
市立体育館	川西町15-3	31-8228
茶屋集会所	茶屋の町8-20	32-1232
竹園集会所	竹園町5-6	22-2484
伊勢幼稚園	伊勢町13-14	31-8313
宮川小学校	浜町1-9	32-1112
県立芦屋高等学校	宮川町-6-3	32-2325
小槌幼稚園	打出小槌町15-7	22-4885
国立海技大学校	西蔵町12-24	22-9341
打出浜小学校	新浜町8-2	23-4581
精道中学校	南宮町9-7	32-1121
春日集会所	春日町13-17	32-5377
浜風小学校	浜風町1-1	23-4591
浜風幼稚園	浜風町1-2	31-1505
浜風集会所	浜風町3-2	38-0960
新浜保育所	新浜町1-1	32-0410
潮見小学校	潮見町1-2	34-0721
潮見中学校	潮見町20-1	34-1601
潮見集会所	潮見町7-1	32-4359
奥池集会所	奥池南町34-4	32-0763
県立芦屋ユースホステル	奥池南町40-30	38-0109

合計 36カ所

※土石流発生の恐れがある時、三条地区は市民センター・西山幼稚園へ避難。山手地区は山手小学校へ避難。

※もしものときの安全10カ条

- 1 テーブルの下などで身を守る
丈夫なテーブルや机の下で身を守り、布団などで頭を保護する。
- 2 すばやく火の始末
「火を消せ！」とみんなで声をかけあい、ガスコンロやストーブの火を止めます。
- 3 窓や戸を開けて出口を確保
特に鉄筋コンクリートの建物内では、建物がゆがんで開かなくなってしまうことがあります。
- 4 火が出たら初期消火
天井に燃え移る前なら、初期消火も可能。
- 5 あわてて外へ逃げない
瓦やガラスなどの落下物、ブロック塀や石塀などの倒壊で、かえって危険な場合も。



6 狭い路地、ブロック塀に近づかない
ブロック塀や門柱、自動販売機などは倒れてくる危険があるので近寄らない。



7 山崩れ、がけ崩れに注意
ラジオやテレビで情報を入手し、山ぎわや急傾斜地域では特に注意すること。



8 避難は必ず歩いて
決められた避難所へ歩いて避難を。なるべく集団で、荷物は最小限に。



9 ケガ人はみんなで助けよう
病院では手が回らない場合もあるので、地域ぐるみで応急・救護を。



10 正確な情報をみきわめよう
うわさやデマに振り回されないこと。ラジオやテレビなどで正しい情報を手に入れて。



※あなたの避難所を確認しましょう

もしものとき、家族がバラバラでは被害が拡大するばかりです。日ごろから避難所はどこに行くのか家族で話し合っておきましょう。
また、休日には避難所まで実際に歩き、避難経路の安全を確認しておきましょう。

※備えましょう、非常時の必要物資

貴重品・トランジスタラジオ・懐中電灯・衣類・応急医薬品・非常食水・燃料・お年寄りや乳幼児食品も用意

地域住民が自主的かつ組織的に防災活動を行うことが、被害を最小限に食い止めるうえで極めて重要です。

芦屋市としても、災害時に活動能力を有する自主防災組織を育成することが緊急と考えています。市民の皆さまのご理解、ご協力をお願いします。